

- 1、フレーム問題 frame problem
- 2、方法論的独我論 methodological solipsism
- 3、ダーウィン機械 Darwin machine
- 4、真理の理論 theory of truth
- 5、真理の対応理論 correspondence theory of truth
- 6、真理の余剰理論 redundancy theory of truth
- 7、真理の最小限主義理論 minimalist theory of truth
- 8、真理の意味論的理論 semantical theory of truth
- 9、真理の引用符解除理論 disquotational theory of truth
- 10、真理の整合理論 coherence theory of truth
- 11、真理の同一性理論 identity theory of truth
- 12、真理のプラグマティック理論 pragmatic theory of truth

1、フレーム問題 Frame problem

人間の心を機械で複製することはできるかという「そっくり複製」問題は、人間以上の仕事をするのでできるロボットを作ることができるかという「作業転換」問題に移ってきた。「そっくり複製」問題であれば、「タンパク質でできた人間の脳を金属と半導体でできたコンピュータで複製することはできない」という解答も、一つの解答でありえた。「作業転換」問題である場合、「ロボットと人間はここがちがう」という指摘の多くを無視することができる。たとえば「フレーム問題」。「AI 事典」（共立出版 2003）でこの単語を調べると、さまざまな用例が出てくるが、どこにも中心となる説明がない。「ミンスキーはフレーム問題を提唱した。人間と同じようにシーンを理解したり、自然言語を理解するための枠組みである」（AI 事典 493 頁、白井義明）という説明が、もっとも定義に近い。英語の哲学事典にはどこにも載っていない。

この言葉を私は「与太郎の水まき論」と解釈した。落語に出てくる与太郎は、「箒ではくときは前もって水を撒いてからにせよ」と指示されたので、二階の畳に水を撒く。すると「ただし、二階の畳に水をまくな」という「ただし書き」をつけなくてはならない。与太郎への指示にどのような「ただし書き」をつけるかが、「フレーム問題」だというのが私の解釈である。

「ただし書き」の例として、「水は100度で沸騰する」という科学法則には「ただし、気圧は1気圧であるとする」、「ただし、沸点上昇効果、沸点下降効果をもつ物質が溶けていないする」などなどがある。

柴田正良「ロボットの心」（講談社現代新書 2001）には、「フレーム問題」という章がある。そこにミンスキーの引用文がある。

「新しい状況に直面したとき(あるいは、現在の問題に対する見方を実質的に変更したとき)、人は記憶の中からフレームと呼ばれる基本的構造を選び出す。これは、人間が記憶している枠組み(フレームワーク)で、その細部を必要に応じて変換することで現実の世界に適合するようになる。……フレームとは、居間にいるとか、子供の誕生パーティに行く……といった、ステレオタイプの状況を表現するためのデータ構造である。」(柴田正良「ロボットの心」講談社現代新書 123 頁)

これを読んで私は「フレーム問題とは、場所柄をわきまえて行動しなさいという与太郎水まき論である」という解釈を「一応正しい」と判断する。

柴田はこう書いている。「フレーム問題をこう言いかえてもいいだろう。無視するというをことさらに行わずに、余計なものをいかにして〈端的に無視する〉ことができるか?、さてしかし、いさぎよく認めてしまうことにするが、現在のところ、少なくともプログラムと記号計算による古典的人工知能の枠内では、フレーム問題を解決することはほぼ不可能である。というのも、潜在的関連性をもつ考慮可能な背景要因 X に関して、「X を端的に無視する」ことは少なくとも「x にまったく言及しない」ことであろうが、人工知能にとっては「x を端的に無視する」ことも「何かを行う」ことであり、「何かを行う」ことは「何かを計算する」ことである。さらに、古典的人工知能にとっては「x に関して何かを計算する」ことは「X を表す記号を操作する」ことであるがゆえに、「X を表す記号を操作する」ことがまさしく「x に言及する」ことにほかならない。」(同 127 頁)

これを読むと、柴田は、ロボットに人間が対処するあらゆる問題に対処するという期待、および「ただし書き」をロボット自身が書くという期待をもっているのではないかと思うが、判定の材料がない。

2、方法論的独我論 (methodological solipsism) 岩波哲学思想事典 (信原幸弘)

「アメリカの哲学者 J. A. フォーダーが 1980 年に唱えた認知科学の方法論上の立場。心と外界の関係よりも心そのものの考察に重点をおき、心を外界から切り離して単独で理解できるとする。これと酷似した考えは、遡れば、外界の超越的存在との関係を捨象して心的状態をその純粋に内在的なあり方において考察しようとする純粋心理学の構想を、現象学の一環として打ちだした E. フッサールに見いだされる。また「方法論的独我論」という用語は、やや異なる意味でだが、R. カルナップが『世界の論理的構築』(1928)において、すべての概念は自己の体験的所与によって基礎づけられるという彼の基本的立場を表現するものとして用いている。

さてフォーダーの方法論的独我論によれば、信念や欲求などの心的状態は外界のあり方とは本質的には無関係に一定の表象内容を持ち、その表象内容に応じて一定の心的活動が展開するとされる。ここで、心的状態の表象内容がその状態の形式的性質に反映され、この形式的性質に基づく形式的操作すなわち計算によって心的活動が行なわれると説くのが心の計算主義 computationalism である。方法論的独我論は心の計算主義と結びついて認知科学

の主流をなしており、外界の捨象による心そのものへの注視は、心の内部機構の詳細な研究を可能にしたが、反面、その点への批判も多い。たとえば認知科学の内部では、心は環境との相互作用や環境への適合という観点抜きには理解できないとする環境主義の動きが最近とみに強まっている。また哲学でも、表象内容が自然的環境や言語的環境のあり方に依存することが強く主張され、心を環境に定位して理解する必要性が盛んに説かれている。」

この項目には「心を外界から切り離して単独で理解できる」前例として、フッサールとカルナップが挙げられているが、どうしてデカルトを挙げないのだろう。私が切り詰めた文案を作ってみた。

「認知科学の方法論上の立場。①心と外界の関係よりも心そのものの考察に重点をおき、心を外界から切り離して単独で理解できるとする。信念や欲求などの心的状態は外界のあり方とは本質的には無関係に一定の表象内容を持ち、その表象内容に応じて一定の心的活動が展開するとする。②この立場は、心的状態の表象内容がその状態の形式的性質に反映され、この形式的性質に基づく形式的操作すなわち計算によって心的活動が行なわれるという心の計算主義 computationalism と連携している。③これと対立するのが、心は環境との相互作用や環境への適合という観点抜きには理解できないとする環境主義である。」

素人目には「方法論的」という言葉の意味が「認知科学の方法論上の立場」という説明でしか示されないという不満がある。

方法論的独我論 (methodological solipsism) ブラックバーン三版

The view that the study of cognitive processes should consider those processes in abstraction from the environment in which the subject is placed. 認知過程の研究は、その仮定を主体が置かれている環境から捨象して考察しなければならないという見方。The most powerful motive for this suggestion is the comparison between cognitive processing and the following of a computer program. こういう示唆を招く最大の動機は、認知過程とコンピュータ・プログラムの経緯とを類比することにある。Any interpretation the elements of a computer program may have in the outside world (such as the fact that the symbol \$ a means a unit of currency) is irrelevant to the execution of the program. コンピュータ・プログラムの要素が、外部世界で持つであろうようないかなる解釈 (たとえば\$は通貨の単位を意味するという事実のような) も、プログラムの執行にとっては、無関係である。The doctrine may also be motivated by the idea that the psychological states of a person must supervene upon the states of the brain and on nothing else. この教義は、ひとの心理状態は脳の状態に随伴して生起し、それ以外の何ものにも依存していないということによっても動機づけられている。Environment indeed affects the state of the brain, but then it is that state alone that creates and fixes the resultant psychology. 環境は、脳の状態に実際に影響を与えているものの、しかし、心理過程を算出し、調整しているのは、その状態だけである。This

line of thought has been severely challenged, notably in the debates over wide and narrow content. この考え方には、広いもの狭いもの、さまざまの内容に関して、厳しい論議がなされている。」

3、ダーウィン機械 (Darwin machine) ブラックバーン三版

「A model for the brain that treats it as a flexible instrument in which the function of groups of neurons is selected by the pressure on the organism to adapt to the surrounding world. 一つの脳のモデルで、ここでは脳を神経群の機能が、有機体の圧力によって、周辺世界に適合するように選択されるような柔軟な道具として取り扱われる。Such functions will include recognizing repeating patterns in the external environment and the body of the agent, and initiating appropriate routines in response. この機能には、外部環境や当事者の身体で反復されるパターンの認識や、それに呼応する適切な手順の新受容が含まれる。」

哲学事典類では、関連項目は見つからなかったが、ウィキペディアに次の記事が掲載されている。「ジョージ・ダイソン (George Dyson) は「機械に囲まれたダーウィン、世界知性の進化」 (Darwin Among the Machines. The Evolution of Global Intelligence, 1998) でバトラーのもともとの前提をアラン・チューリングの人工生命、人工知能に適用した。ダイソンの主張は、現代の技術から意識が進化することは避けられないということである。」ダイソンについては、サム・ウィリアムス「人工知能のパラドックス」(本田成親訳、工学図書 2004 年 119 頁) で言及されている。人工知能に進化論を導入することの可否についての論争の当事者である。サム・ウィリアムスは、論争の当事者の一人としてジャロン・ラニアー (Jaron Lanier 1960-) の名も挙げている。ラニアーが批判している立場は次のような内容だという。

(1) 生きとし生けるものに関わるあらゆる現象は、突き詰めていけばどれもメカニカルな、またはサイバネティックス的なプロセスに還元できる。(2) 「主観的な経験」、あるいは「個人の意識」などというものは吹けば飛ぶような幻想にすぎない。(3) 生物学的な進化を駆り立てているのと同じダーウィン進化論的な力がテクノロジーの進化をも駆り立てている。(4) テクノロジーが現在の勢いで進化しつづければ、最終的にはホモ・サピエンスという種全体が、進化史上に一時代を画す大革命あるいは大異変によって忘却の縁へと追いやられることになる。サム・ウィリアムス「人工知能のパラドックス」(本田成親訳、工学図書 2004 年 130 頁)

ブラックバーン3版の「ダーウィン機械」こそ、まさに現代で人工知能論として議論されている当のものである。それは生命体として進化を遂げ、人間という進化の頂点を追い抜くかもしれない。事態を裏側から見ると「ウイルスは生命体に寄生してしか生きられな

い。コンピュータはウイルスに感染する。ゆえに、コンピュータは生命体である」という存在論的証明がまかりと通っている。そこにさらに「すべての生命体は、進化の法則のもとに置かれる。進化から取り残された種は、やがて絶滅し、進化を受け入れた種が適者生存の原則によって生き延びる。ゆえに人工知能は、人間を絶滅させる」という論法が堂々と語られている。その手順をさらに簡略化すると「比喩的にある属性を持つものは、実体的にその属性をもつ」という比喩の実体化である。比喩の実体化という誤りは、ロマンティズムのお家芸であったが、いまは情報工学のお家芸となっている。

4、真理の理論 theory of truth

「雪は白い」と、「『雪は白い』は真理である」との間にはどのような違いがあるかという問いに対して、「違いはない」という答えをだす立場を「真理のデフレ理論」deflationary theory of truthという。デフレ期には通貨が収縮し買い控えて経済活動が委縮するというイメージとつながっている。同種のデフレ理論の代表格は「真理の余剰理論」redundancy theory of truthと呼ばれる。「真理」は余計なつけたしであるという主張である。「真理の最小限主義理論」minimalist theory of truth、「真理の意味論的理論」semantical theory of truth、「真理の引用符解除理論」disquotational theory of truthもデフレ理論に、含まれる。

「真理のインフレ理論」inflationary theory of truthを自分から主張する人はいないが、「真理の対応理論」correspondence theory of truth、「真理の整合理論」coherence theory of truth、「真理の同一性理論」identity theory of truth、「真理のプラグマティック理論」pragmatic theory of truth、「真理の合意理論」consensus theory of truth、「真理の遂行的理論」performative theory of truth「真理の使真理論」truthmaker theory of truthが、そこに含まれる。

今回、翻訳がだされたポール・ホーリッジ「真理」入江幸男、原田淳平訳、勁草書房は、デフレ理論の中でももっとも強力な「真理の最小限主義理論」の代表的な著作である。

5、真理の対応理論 correspondence theory of truth

岩波哲学思想事典の野本和幸氏による項目（真理論）の一部

「対応説：真理は、文・言明・命題等と事実との対応(correspondence)にあるとの説。
‘有るものは有ると語り、有らぬものは有らぬと語ることが、真である’とのアリストテレスの主張が、対応説の古典的定式とされる。現代ではラッセルが、文や判断が真となるのは、それに対応する諸対象の複合体である事実が存在する場合だと主張した。また前期

ヴィトゲンシュタインによれば、名前の連鎖である文が真となるのは、(i)各名前と対象とが1対1対応し、また当の文中の名前の配列が対象の配列と構造上同型(文が事態の写像)で、かつ(ii)その事態が現実に成立する場合である。」

ブラックバーン3版「真理の対応理論」correspondence theory of truthの一部

「Aristotle said that a statement is true if it says of what is that it is, and of what is not that it is not (Metaphysics Γ, iv. 1011). アリストテレスは、ある言明は、それがそれがそうであるようなものを語っているなら真であり、そうでないものを語っているなら真ではないと言った。But a correspondence theory is not simply the view that truth consists in correspondence with the facts, but rather the view that it is theoretically interesting to realize this. しかし、対応理論は単純に真理は事実との対応に成り立つという見方ではない。むしろ、真理は理論的にその実現に関心があるという見方である。Aristotle's claim is in itself a harmless platitude, common to all views of truth. アリストテレスの主張は、真理のあらゆる味方に共通の無害な決まり文句である。A correspondence theory is distinctive in holding that the notion of correspondence and fact can be sufficiently developed to make the platitude into an interesting theory of truth. 対応理論は対応という観念を維持しているという点で際立っている。事実が有効に展開されるなら、この決まり文句が真理の興味ある理論になる。Opponents charge that this is not so, primarily because we have no access to facts independently of the statements and beliefs that we hold. 反対派は、実際にそうではないと訴える。第一に、この言明とは独立に事実と我々が抱く信念にアクセスを持たないのであるから。We cannot look over our own shoulders to compare our beliefs with a reality apprehended by other means than those beliefs, or perhaps further beliefs. われわれは自分の肩越しに我々の信念とこの信念とは別の手段で、もしかしたらもっと先の信念と比較することはできない。Hence we have no fix on 'facts' as something like structures to which our beliefs may or may not correspond. なぜならわれわれは我々の信念がそれと対応したり、対応しなかったりする構造のような事実位置するわけではないから。」

われわれは、セザンヌのキャンバスと机の上のリンゴなどを比べて、「セザンヌさんリンゴの数が違ってます」などと指摘する立場と同じ立場にいて、命題と事実を比較するのではない。ヴィトゲンシュタインは、命題と事実が重なり合うというイメージをいだいていたかもしれないが、重ね合わせができるのは、おなじ空間のなかの二つの物体、二つの画像のような場合だけである。「命題と事実の対応」、「主観と客観の一致」などの表現は、真理の比喻であって、特性把握ではない。

6 「真理の余剰理論」 redundancy theory of truth ブラックウエル 2004 の一部

「A theory claiming that the predicate "true" is redundant, for to say that it is true that P is equivalent to saying that P. [真理の余剰理論とは] "true" という述語が余計であると主張する理論である。その理由は、'Pは真である' と言うことは、'P' というのと等価だからである。The assertion that a sentence is true is precisely the same as the assertion of that sentence. ある文章が真であると断定することは、その文章を断定することと全く同じである。For instance, "It is true that grass is green" amounts to: "Grass is green." たとえば '草は緑だというのは真である' は、'草は緑だ' に帰着する。Hence, "is true" or "is false" are predicates that matter only stylistically and rhetorically, 「真・偽」は、文体と修辞にしか関与しない述語である。and can be eliminated without semantic loss.

「真・偽」を取り除いても、意味論的な損失はない。The concept of truth is useless in giving a theory of meaning. 真と言う概念は、意味の理論を語るには役に立たない。Truth is essentially a shallow concept. 真は本質的に狭い概念である。The problem of truth is nothing but a linguistic muddle. 真の問題は言語学的な混乱にすぎない。This theory was developed by philosophers such as Frege, Ramsey, Wittgenstein, Prior, Ayer, Mackie, and a Grover. この理論は、フレーゲ、ラムジー、ヴィトゲンシュタイン、プライア、エア、マッキー、グラバーというような哲学者たちによって展開された。However, although the truth-predicate is a redundant, there are still many philosophical problems about the nature of truth. たとえ真と言う述語が余計であったとしても、真の本質についての哲学的問題はたくさん残っている。Asking what makes "It is true that grass is green" true will lead to admitting an extra-linguistic reality. '草が緑であるは真である' を真にしているものは何かという問いを立てるなら、言語外の実在を許容しているということに思い至る。The truth-predicate enables us to move from talk about language to talk about the world. 真と言う述語は言語についての語ることから、世界について語ることに道をひらく。Hence, the redundancy theory does not cover all meanings of truth. だから、真理の余剰理論は、真理の意味のすべてをカバーしていない。Nevertheless, this theory of truth is also a starting-point for Tarski's semantic theory of truth. しかし、この余剰理論がタルスキの意味論的な真理理論の出発点になる。」

7、「真理の最小限主義理論」 minimalist theory of truth

ポール・ホーリッジ「真理」入江幸男、原田淳平訳、勁草書房 133 頁

「真理に対するデフレ的態度——私が「ミニマリズム」と呼ぶのはその改良型である——は、以下の世に普及した自然な考えに反対する。その考えによれば、真理の性質はある種の基底的本性を持ち、哲学者としての私たちの問題は、その本性が何であるかを語り、真理を概念的ないし実質的に分析し、少なくともおおよそで、何かが真であるための必要十分条件を特定する。この伝統的な観点の産物の中には、対応説(κ が真である iff κ が事実と対応する)や、整合説(κ が真である iff κ が整合的な信念体系の構成員である)、検証主義者の理論(κ が真である iff κ が理想的な条件下で証明可能か、検証可能である)、プラグマティストの理論(κ が真である iff κ を信じることが有用である)がある。」

以下ホーリッジは、約30ページの説明を与えている。とても長い説明なので、ここには引用しない。

8、「真理の意味論的理論」 semantic theory of truth

ブラックバーン3版とブラックウエル(2004)にこの項目が挙げられているが、「タルスキの真理条件」(野家啓一、門脇俊介「現代哲学キーワード」有斐閣2016、42頁)を先に読むことが、理解を助けると思う。

「タルスキが1933年に真理論とは任意の文について以下の真理規約を帰結するものであると提案して以来、言語内外の関係について原則として採用されている。

(T)命題「雪は白い」が真であるのは、雪が白いとき、またそのときに限る

すなわちタルスキは命題の意味内容が現実世界と一致するときにその命題が真であるということを主張する。」

「真理の意味論的理論」 semantic theory of truth ブラックバーン3版

「The view that if a language is provided with a truth definition, this is a sufficient characterization of its concept of truth; もしもある言語に真理条件が備わっているなら、それは真理の概念についての十分な特徴づけであるという立場である。there is no further philosophical chapter to write about truth itself or truth as shared across different languages. ここには、真理そのものとか、異なった言語の間で共有される真理とかについて、さらに書かれるべき哲学的な章がない。The view is similar to deflationary and disquotational theories. この見方は、真理のデフレ理論と真理の引用符を外す理論とに似ている。」

この項目は短かすぎて、「真理の意味論的理論」の中身が記述されていないという欠点を示している。タルスキに対するブラックバーンの皮肉な見方を述べているように見える。「真理のデフレ理論と真理の引用符解除理論とに似ている」という文言を正確に理解することは難しい。

「真理の意味論的理論」 semantic theory of truth ブラックウエル (2004)

A theory developed by Tarski and originally intended to solve semantic paradoxes, especially the liar paradox. タルスキによって展開された理論である。この理論は、もともとは意味論的パラドックス、とくに嘘つきパラドックスを解くことが意図されていた。It suggests that a definition of truth cannot be adequately provided in the object language, that is, in the language that describes the world and does not contain the truth-predicate. この理論は、真理条件が対象言語に適切に装備されていることはありえないということを示唆している。すなわち、世界を記述するのであって、真理述語を内包することはない言語において。It has to be formulated in a metalanguage, that is, the language that talks about the object language. それはメタ言語において定式化される。すなわち、対象言語について語る言語である。According to this theory, “ ‘P’ is true if and only if P,” where ‘P’ is the name of the sentence and P is the sentence itself. この理論によれば、Pである場合に (iif) 限ってPは真理である。‘P’ は文章の名前であり、Pは文章そのものである。For example, “Snow is white” is true if and only if snow is white. A sentence is true in a given language if its elements are so combined as to state what is the case. たとえば「雪は白い」が真理であるのは、雪が白い場合のみ (iif) である。The theory has two parts: adequacy conditions on definitions of truth and a definition of truth in terms of satisfaction. この理論には二つの部分がある。真理の定義にもとづく適切な条件と、充足という術語で真理を定義することである。Tarski thought that this theory is suitable only for certain artificial and formal languages but not for natural languages. タルスキはこの理論が適用できるのは、ある程度人工的な言語と形式化された言語とであって、自然言語には向かないと考えた。Donald Davidson has developed a truth-conditional approach to meaning on the basis of this theory by relating sentences in a particular language with their truth conditions. ドナルド・デヴィッドソンは、この理論にもとづいて、真理条件をともなう特定言語における文章に関連付けて、意味にむけて真理条件的なアプローチを展開した。」

9、「真理の引用符解除理論」 disquotational theory of truth

ブラックウエル (2004)

「The claim that truth is nothing more than a simplifying linguistic device, with the truth-predicate understood as having a distinctive role according to the principle of disquotation. 真理とは、言語的な仕掛けの単純化にすぎない。真理と言う述語で、引用符を外す原則に従って、特質を示す役割を保持するものとして理解される。According to this principle, for any appropriate sentence p, "p" is true if and only if p. この原理によれば、適正な文章に関してなら、"p" is true if and only if p [pであるなら、かつその場合に限り"p"は真である] が成り立つ。The sentences "p" and "is true" are in some sense equivalent in meaning, and "so and so is true" amounts to "so and so" and no more. 文章"p"と "is true"とは、意味の点では同等である。「これこれは真だ」ということは、「これこれだ」ということに帰着し、それ以上ではない。The truth-predicate produces a sentence that can be used to say the very same thing and to perform the very same propositional acts as the original sentence. 真理と言う述語は、ある文章にまさにそのものを語るために、また、元の文章と同じ命題的な行為を遂行するために使用できるということを生み出す。Accordingly, truth is a matter of the linguistic role of an expression rather than an external relation of correspondence with the world or a property. これによれば、真理は、世界とか特性とかとの外的な対応関係であるよりは、表現の言語的な役割に関する問題である。The major problem confronting the disquotational theory is to explain the fact that not all utterances are treated as having truth-values. この引用符解除理論に立ち向かう主たる問題は、すべての言表が真理価値を持つものとして扱われるのではないという事実を説明することである。」

ウオルフガング・キュンネ「真理の諸概念」(Wolfgang Kuenne: Conceptions of Truth, Oxford 2003) は、ホーリッジ「真理」(1998) がミニマリズムへまっしぐらに進んでいくのと対照的に、多様性に配慮している。その中に引用符解除理論の説明がある (p.226) ので――同書の中での参照個所の指示を削除して――紹介したい。

「The disquotationalist redundancy claim should be strictly distinguished from another one. 引用符解除主義者の余剰理論の主張は、他の余剰理論から厳密に区別されなくてはならない。(一部削除) They maintain that what is said remains unaffected whether we attach '(it) is true' to a that-clause or whether we simply erase the complementizer 'that': 彼らは言われていることは、thatクローズにわれわれが(it) is trueを付けるか否かにかかわらず、また我々が補文を導入する因子 that を単純に消してしまうか否かにかかわらず、残っていると主張する。

(Den =) [この記号はおそらく脱名詞化 denominalization 論の定式を指している、加藤] To say that it is true that p is to say that p. p であることは真であると言うことは、p と言うことである。

The Denominalization Schema is weaker than this identity schema. By contrast, disquotationalists take homophonic T-equivalences, i. e. instances of the Disquotation Schema 脱名詞化論の定式は、同一性の定式よりも弱い。反対に、引用符解除主義者は、等質的な T-等価式、たとえば引用符解除定式を採用する。[すなわち引用符解除の定式(Dis)は以下のようになる]

(Dis) 'p' is true iff p もしも p ならば、その場合に限って、p は真である。

as their starting-point and contend that what is said remains unaffected whether we append the truth-predicate to the quotational designator of a (declarative) sentence or whether we simply delete the quotation marks: [引用符解除主義者は] 出発点では、話されることはわれわれが真理述語を宣告文の引用符に付けるか、それとも単純に引用符を削除するか否かに関係なく保たれると論議する。[すなわち]

(Dis =) To say that 'p' is true is to say that p. 'p' は真だと言うことは、p と言うことである。

The Disquotation Schema, too, is weaker than the corresponding identity schema: 引用符解除の定式もまた、対応する同一性定式よりは弱い。if you accept an instance of (Dis =), もしあなたが (Dis =) の事例を受け容れるならば you are committed to endorsing the corresponding instance of (Dis), あなたは、その裏書となる対応する (Dis) の事例にも加担している。 but there is no such obligation in the other direction. しかし、方向を別にすればそのような拘束は存在しない。」

大まかにいうと引用符解除主義というのは、「To say that 'p' is true is to say that p. 'p' は真だと言うことは、p と言うことである」と言う文面に示されるように、引用符のない言い方だけを残しても文意に変わりがないという主張である。引用符解除主義は、余剰理論の単純化・徹底化であると思われる。

disquotational theory of truth ブラックバーン 3 版

「The simplest formulation is the claim that expressions of the form 'S is true' mean the same as expressions of the form S. この [引用符解除理論の] もっとも単純な定式は、'S is true' という式の表現が、S という式の表現と同じだという主張である。Some philosophers dislike the idea of sameness of meaning, 哲学者の中には意味の同一という観念が嫌いな人がいる。and if this is disallowed, then the claim is that the two forms are equivalent in any sense of equivalence that matters. 意味の同一性が許されないなら、この主張はこの二つの式は、等価のあらゆる有意義な意味においても等価という主張になる。That is, it makes no difference whether people say 'Dogs bark' is true, or whether they say, dogs bark. すなわち犬は吠えるは真であると言うか、犬は吠えると言うかに違いがない。In the former representation of what they say the sentence 'Dogs bark' is mentioned, but in the latter it appears to be used, so the claim that the two are equivalent needs careful formulation and defence. 彼らが語る前の表現では「犬は吠える」 (Dogs bark) という文章が思い浮かべられていたのに、後の表現では、使われた状態で現れる。この二つの表現が等価であるという主張は定式化と弁護に注意深さが必要なのである。On the face of it someone might know that 'Dogs bark' is true without knowing what it means (for instance, if he finds it in a list of acknowledged truths, although he does not understand English), 一見したところ、その人は「犬は吠える」は真であることを、それが何を意味するかが分からないままで、知っているのかもしれない。例えば、彼は、英語はわからないくせに、公認の真理のリストのなかにそれを見つけたのかもしれない。and this is different from knowing that dogs bark. これは犬は吠えるということを知っているのとは違う。Disquotational theories are usually presented as versions of the redundancy theory of truth. [真理の] 引用符解除論的な理論は、通常は真理の余剰理論の違った諸表現として表される。」

10、「真理の整合理論」 coherence theory of truth

岩波哲学思想事典、野家啓一

「中世スコラ哲学では真理を「知性と事物との合致(adaequatio intellectus et rei)」とする対応説的真理観が明確な形で定式化される。ただしこの知性を神の知性とするか、人間の知性とするかで解釈は分かれる。前者の立場にはいまだ存在論的真理観の名残が見られるが、近代以降は後者の意味で受け取られ、さらにそれを観念・判断・命題などいずれと解するかで見解は対立する。また、認識論の隆盛とともに合致(adaequatio) や〈対応〉の意味が問題とされ、真理を命題どうしの整合性の中に見る〈整合説的真理観〉が力を得るのも近代の特徴である。」

弘文堂現代倫理学事典、伊藤春樹

「整合説 (coherencetheoryoftruth) は、命題の真理性を、別の命題との関連のもとで考えよ

うというものである。ある命題が真であるというのは、その命題がなんらかの事実に対応しているからではなく、さまざまな命題がつくるネットワークのなかに整合的に収まるからである。このような考えは、複雑な理論体系を構成している個々の命題にそれぞれなんらかの事実が対応していると考えより、全体としての理論がその周辺部分においてなんらかのかたちで経験的現実と結びついているとする全体論 (holism) に、より適合的である。」

11、「真理の同一性理論」 identity theory of predication (identity theory of truth) ブラックバーン3版

「identity theory of predication 述語の同一性理論 (identity theory of truth 真理の同一性理論) Theory articulated by Bradley, ブラッドレーによって取り出された理論。 according to which there is no division between a true proposition and the fact making it true. それによれば、真の命題とそれを真にする事実との間には区切りがない。 The idea is the outcome この観念がどこから来たかと言え、 both of Bradley's belief that only a world-sized whole can really be true [there is strictly no such thing as partial truth), 一つは世界規模での全体だけが本当に真理でありうるというブラッドレーの信念である。 and his idealist denial of a distinction between the knowing subject and what it is that is known. そして彼の観念論者としての知る主体と知られているということのなんであるかとの間には区別がないという否定とである。」

12、「真理のプラグマティック理論」 pragmatic theory of truth

弘文堂現代倫理学事典、伊藤春樹

実用主義的ないしは道具主義的真理観 (pragmatic or instrumentalist theory of truth) は、命題の真偽は、その命題が、現実にどれだけ有効であるかによってぎまると考えるものである。雨が降っているときに「雨が降っている」という言明は、洗濯物を取り込むことや、走って帰るというその場に最適な行動を導く有効な命題であるから真理性が高いというわけである。「神が世界を創った」という言明は、今日の西欧型の工業社会では、ほとんど使いみちがないから偽に近いということになるだろう。」

ポール・ホーリッジ「真理」（入江幸男、原田淳平訳、勁草書房）が、出版されたので、その記念として「真理」に関する議論を取り上げた。本稿の前半は、人工知能論の関連項目である。新しくレイシー哲学事典の改訂版（the routledge dictionary of Philosophy, 4th edition 2010）を入手したが、「真理」に関する項目は新しくなっていない。さまざまな観点から比較してみて、ブラックバーン3版が、とても優れていると感じた。（哲学新語集4了）